様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2014
課題番号：２５５９０１８５

研究課題名（和文）青少年におけるインターネット依存への臨床心理学的介入

研究課題名（英文）Psychological intervention for Internet addiction among adolescents

研究代表者
本城　秀次（Honjo, Shuji）

名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・教授

研究者番号：９０１８１５４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：1812名の中学生に対してネット利用状況の質問・日本語版インターネット中毒テスト・Strength and Difficulties Questionnaire(SDQ)を行った。その結果，中学生の半分以上が1週間に1回以上ネットを利用していることが分かり，中学生においてもネット文化が浸透していることが示唆された。また，女子中学生にネット依存傾向が強いことも示された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the frequency of Internet use in Japanese junior high school students. Further, we examined the association between Internet addiction and Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ). Japanese junior high school students (n=1812, mean 14.1 years) completed the state of Internet use questionnaire, the Japanese Internet Addiction Test (IAT) and SDQ. Approximately 45% of the participants used the Internet once a week or more. Female participants showed a higher tendency of Internet addiction. Internet addiction moderately influenced aspect of their negative behaviors in SDQ. Our findings suggest that Japanese junior high school students were familiar with the Internet. The Internet might have a risk in aspects of mental health for Japanese junior high school students.

研究分野：精神医学

キーワード：ネット依存　青年期

１．研究開始当初の背景

近年，インターネット（以下，ネット）が我々の日常生活するに伴い，ネットの様々な影響が報告されつつある。総務省の通信利用動向調査（2011）では，H22 年末におけるネットの人口普及率は 78.2%と，約 8 割に上っている。勉学や就職活動における情報収集だけでなく，最近はオンライン上で物を売買したり友人を作ったりと，ネットが様々な形で用いられるようになっている。Young（1998 / 1998）はネット依存について，寝食を忘れてネットにのめりこんだり，ネットの利用をやめられないと感じたりする，ネットに精神的に依存した状態と定義している。ネット依存を扱った研究としては，ネット依存傾向と日常的精神健康との関連や，ネット依存傾向プロセスの検討がなされている（鄭, 2008；鄭・野島, 2008）。海外では，ネット依存と ADHD（Yoo ら, 2004），抑うつ（Ha ら, 2007），衝動性（Cao, Su, Liu ら, 2007），社会恐怖および敵意（Yen ら, 2007）などとの関連が検討されている。

ネット依存は，大人だけでなく，ネットを利用し始める時期となる中学生においても問題になりつつある。現在の中学生は，遊びの約束や連絡網などのためにネットを使用している。そのため，友人関係を維持するためにネットを手放すことができず，昼夜ネットにかじりついたりしている生徒もいる。しかし，中学生を対象にしてネット依存に注目した研究は，ほとんど行われていない。

２．研究の目的

本研究では中学生におけるネットの利用状況を調査した上で，ネット依存と心理的特性との関連について性差を考慮に入れて検討する。

３．研究の方法

調査対象者は，A 県の中学生 1812 名（平均年齢 13.9 歳）であった。調査は 2011 年 4 月頃に，各クラス毎にクラス担任が集団で実施した。

質問紙の内容

（1）ネット利用状況

ネット利用状況を調査するにあたって，本研究ではネット利用頻度と利用アプリケーションに注目した。ネット利用頻度としては，ネット利用媒体としてパソコンと携帯電話を挙げ，それぞれにおけるネット利用頻度を尋ねた。

（2）ネット依存

ネット依存の尺度としては，長田・上野（2005）の日本語版インターネット中毒テスト（以下, JIAT）を用いた。JIAT は Young（1998）が開発した Internet Addiction Test の日本語版であり，様々な国で使用されている国際的なネット依存の尺度である。評定は「まったくない」から「常にそうだ」の 5 件法であった

（3）SDQ

Goodman ら（2000）の Strength and Difficulties Questionnaire（以下 SDQ）の日本語版を用いた。SDQ は適用年齢 4 歳から 16 歳の質問紙で，11 歳未満は保護者らが評定し，11 歳以上は自己記入できる。行為面，多動性，情緒面，仲間関係，向社会性の 5 因子からなる尺度であり，行為面，多動性，情緒面，仲間関係は負の側面を，向社会性は正の側面を評価している。

４．研究成果

ネット利用状況として，ネット利用頻度と利用アプリケーションについて検討した。パソコンでのネット利用頻度・時間について集計した結果，約 45%の調査対象者が 1 週間に 1 回以上，また 1 日に 1 時間以上ネットを利用していることが示された。携帯電話でのネット利用頻度について集計した結果，1 週間に 1 回以上ネットを利用する調査対象者が約 30%なのに対して，約 60%の調査対象者が利用しないということが示された。利用アプリケーションに関しては，アプリケーションの中でホームページ（19%）・ブログ（15%）・動画（15%）・メール（14%）が良く利用されていた。

各尺度得点の相関を分析した結果，ネット依存と SDQ の合計得点との間で正の相関が示された（r=.23，p< .01）。SDQ の因子ごとに見てみると，ネット依存と情緒面との間で正の相関が（r=.26，p< .01），行為面（r=.16，p< .01），多動性（r=.16，p< .01），仲間関係（r=.12，p< .01）との間でやや弱い正の相関が見られた。また，ネット依存と向社会性との間に有意な相関は認められなかった（r=-.02，n.s.）。

次に従属変数を SDQ の各因子の得点とし，その項目全体の得点に対して，ネット依存（低依存群，高依存群）×性別（女子，男子）の 2 要因分散分析を行った。第一因子である「行為面」における分析の結果，ネット依存の主効果（F(1,1803)＝43.92，p ＜ .01）と性別の主効果（F(1,1803)＝13.24，p ＜ .01）が有意となった。同様に，第四因子である「仲間関係」においても，ネット依存の主効果（F(1,(1803)＝12.99，p ＜ .01)と性別の主効果（F(1，1803)＝11.71，p ＜ .01）が有意となった。平均を見てみると，性別に関わらず，高依存群の方が低依存群よりも得点が高かった。またネット依存に関わらず男子の方が女子よりも得点が高かった。第二因子である「多動性」における分析の結果，ネット依存の主効果（F(1，1803)＝27.02，p ＜ .01）が有意となった。平均を見てみると，性別に関わらず，高依存群の方が低依存群よりも得点が高かった。第三因子である「情緒面」における分析の結果，ネット依存の主効果（F(1,1803)＝48.68，p ＜ .01）と性別の主

効果（F(1,1803)＝131.74，p ＜ .01）が有意となった。平均を見てみると，性別に関わらず，高依存群の方が低依存群よりも得点が高かった。またネット依存に関わらず女子の方が男子よりも得点が高かった。第五因子である「向社会性」における分析の結果，ネット依存の主効果（F(1,1803)＝6.10，p ＜ .05）と性別の主効果（F(1,1803)＝13.87，p＜.01）が有意となった。平均を見てみると，性別に関わらず，低依存群の方が高依存群よりも得点が高かった。またネット依存に関わらず女子の方が男子よりも得点が高かった。

本研究の結果，中学生の半数以上が１週間に１回以上ネットを利用していることが示された。また，ネット利用においては携帯電話よりもパソコンを媒体とする中学生が多いことも示された。総務省統計局（2011）でも，6歳から19歳は携帯電話よりもパソコンの利用が多いことが示されており，本研究の結果は先行研究の結果と一致している。

ネットアプリケーションに関しては，ネットの中でもよく使用されるホームページやメールに加えて動画を利用している中学生が多いことが示された。これまで，中学生にとって身近で日常的に接しているメディアはTVであり，多くの中学生がTVから情報を得たり影響を受けたりしてきたことが指摘されている（井上・林，2002a；井上・林，2002b；板倉，1983）。動画は基本的には映像を投稿したり投稿された映像を見たりすることができるアプリケーションであり，動画視聴は TV に近い役割を得ていることが考えられる。そのため，ネットアプリケーションの中でも動画が多く利用されているのかもしれない。

動画サイトでは，ビデオカメラなどで撮影した動画などをインターネット上で複数の人に公開することができる（総務省情報通信国際戦略局情報通信経済室，2010）。TV と異なり，我々は自分の好きな時に好きな動画を何回でも見ることができる。動画の内容も非常に多岐にわたっている。そのため大衆向けの TV に比べて，自分の趣味や関心に近い動画をピンポイントで見つけることが出来る。更に，近年では自分で動画を作成したり，挙げられている動画に対してコメントできる動画サイトも出現している。視聴者が TV よりも能動的に関わることができるようになってきており，より動画へのコミットが見受けられている。このような動画自体の特性も本研究の結果には影響していると思われる。

また，ブログの利用も中学生で多く見られた。　ブログは若年層から高齢層まで幅広く利用されており，より一般的に使用されているアプリケーションの１つである（総務省情報通信国際戦略局情報通信経済室，2010）。ブログにはオンライン・オフライン双方のコミュニケーションを促進させる役割があり（総務省情報通信国際戦略局情報通信経済室，2010），特に思春期になり親から自立し興味・関心を広げる時期である中学生にとって，自らの情報を発信したり他者の情報を得たり友達を作ったりするには適したアプリケーションなのかもしれない。

ネット依存と SDQ との関連について検討した結果，ネット依存と SDQ における「行為面」「多動性」「情緒面」「仲間関係」といった負の側面との間に関連がある事が示された。また分散分析の結果，負の側面においては高依存群の方が低依存群より高い点数を取ることが示され，ネット依存が中学生の行動に負の影響を与える可能性が示唆された。ネット依存に陥ることで，対人関係における問題が生じてきたり，日常生活に支障が生じたりと，人間にとっての様々な側面に悪影響を与えることが様々な研究者によって指摘されている。本研究の結果，「行為面」「多動性」「情緒面」「仲間関係」といった負の側面に対するネット依存の影響は，大人だけではなく中学生に対しても認められることが示唆された。

一方本研究では，ネット依存と「向社会性」との間には関連が見られず，ネット依存が社会や他者への援助といった「向社会性」に悪影響を与える可能性は低いことが示唆された。また分散分析においては，「向社会性」において低依存群の方が高依存群よりも高い点数を取ることが示された。ネット利用は社会的相互作用のために肯定的側面があることや（Grohol，1999），ネット上の友人は孤独感を軽減させてくれる存在であること（安藤,2003）が指摘されている。更に安藤ら（2008）は高校生を対象とした研究で，ネットや携帯電話を用いて友人へのソーシャルサポートが提供されることを指摘している。匿名性が確保されているネットでは年齢・性別・社会的地位を超えた新しい交友関係が構築されやすい（Parks & Floyd，1996）。ネットを利用することは，必ずしも悪影響を与えるのではなく，対人関係や社会とのつながりを保ってくれるツールにもなっているのではないかと思われる。

性差を検討した結果，女子の方が男子よりも，ネット利用頻度が高く，ネット利用時間が長く，ネット依存が高い事が示された。この傾向は国内における先行研究の結果と一致している。一方海外では、男子の方が女子よりもネット依存傾向が高いという報告が多い。女子の方が男子に比べてネット依存傾向が強いという結果は、日本に特有である可能性が考えられる。この点については、より詳細に検討していく必要があると思われる。

ネット利用状況について男女別に見てみると，特に女子ではメール・ブログがやや多いのに対して，男子では動画・ゲームの利用がやや多いことが示された。女子の利用が多いアプリケーションは，自分の生活や自分自身の事を発信したり他者とやり取りとしたりすることが目的となっているものである。

女子は男子よりも友人や家族とのコミュニケーション手段として携帯電話を利用する傾向がある（松田，2001）。従って，女子は自己表現をしたり他者とコミュニケーションをとったりする１つの手段として，ネットを利用しているのかもしれない。一方で，男子の利用が多いことが示されたゲームは，他者とのコミュニケーション以外にもゲームそのものを楽しむという側面が強いように思われる。男子はアプリケーションの内容自体に重点を置いているのかもしれない。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

小倉正義・金子一史　ネットいじめを考える子どもの心と学校臨床，８，60-70，2013．

〔学会発表〕（計 2 件）

山脇彩・小倉正義・濱田祥子・本城秀次・金子一史　中学生における不適応的なネット使用と援助希求性との関連，日本心理臨床学会第 33 回大会，2014.

Hamada, S., Ogura, M., Yamawaki.A., Honjo, S., Sourander, A., Kaneko, H. Bullying and self-cutting among Japanese adolescents. 15th International Congress of European Society for Child and Adolescent Psychiatry. 2013.7. Dublin, Ireland.

６．研究組織

(1)研究代表者

本城　秀次（HONJO SHUJI）
名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・教授
研究者番号：90181544

(2)研究分担者

金子　一史（KANEKO HITOSHI）
名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・准教授
研究者番号：80345876